
かほくがた

河北潟湖沼研究所通信 Vol.11 No.4



シンポジウム「河北潟の水辺を守るためには」(講演者は金沢星稜大学の永坂正夫氏)

シンポジウム「河北潟の水辺を守るためには」は、2月5日に金沢市の労済会館において約60名の参加のもとおこなわれ、活発な議論が交わされるなか、住民が主体となった水辺再生の可能性を確認しました。

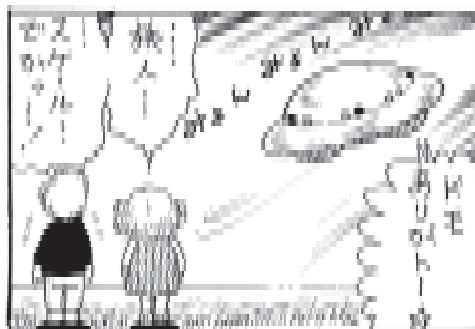
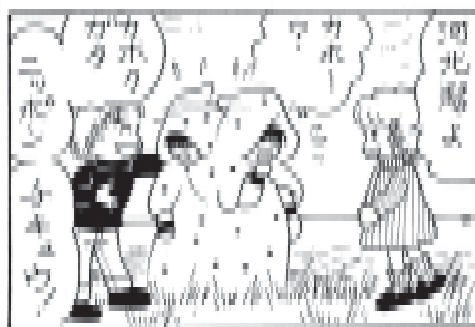
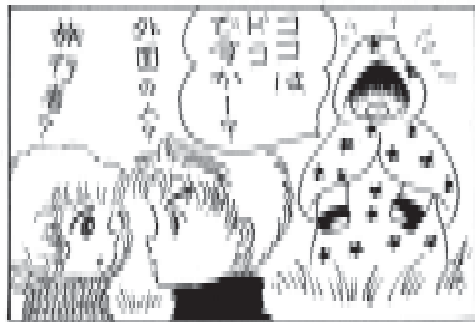
第1部は3名の演者による講演で、まず最初に、日本の水辺と比較した河北潟の状況、国内外の湖沼における水質浄化と自然再生の取り組みの紹介がなされました。次に、干拓により河北潟の水辺がどう変わったか、水辺を再生する上での市民の役割についての講演が行われました。最後に、昨年取り組まれた「河北潟水質浄化・水辺再生プロジェクト」の結果が報告されました。

第2部は当初のパネルディスカッションから予定を変更して、3つの分科会を行いました。全体テーマは、「市民による水辺の保全の可能性」として、分科会1は、水辺保全の目標ということで、「市民による河北潟の水辺再生基本構想づくり」のサブテーマで話しあいました。分科会2は、活動の仕組みづくりとして、「水辺再生の主役は市民 参加の仕組みを考える」というサブテーマ、分科会3は、実践のための技ということで、「手作業で楽しい水辺の保全 技を考える」と題して話し合いをおこないました。どの分科会も時間いっぱいまで熱心な話し合いが続けました。

(関連記事3頁)

カコチムン かほくがた 十の
 アウクン サルドレン 十の

河北潟の沿岸をって行った人々



パーシバル・ローエル (1855 ~ 1916)

人類がいままで確認できなかった太陽系の惑星の中で、もっとも外側にある冥王星の数学的計算による予知発見者として、また、ユニークな火星の研究によって天文学に不滅の業績を残したパーシバル・ローエルは、1855年3月13日アメリカ合衆国、マサチューセッツ州ボストンでオーガスタ・ローエルの長男として誕生した。彼の一族は学者を多く輩出している家系で、父はハーバート大学出身の富裕な実業家。弟は後年、ハーバード大学の総長。妹は高名な詩人。叔父方にもハーバード大学の教授らがいる。

明治16年(1883)初めて来日。日本語を習得して韓国へ。翌年日本へ帰着。同年シンガポール・インド・ヨーロッパ経由で帰国。明治22年(1889)1月再来日。5月能登へ旅した。6月帰国。明治24年(1891)4月来日。同年10月帰国。明治25年(1892)12月来日。口径6インチの天体望遠鏡を持参。翌年末、永久に日本を去り帰国。

彼は、火星に高等生物が生息し、その表面上に見える細い線状のものは、彼らの作った運河であるとの説を唱えた。今の子供は誰も、火星に高等生物が生息していないことを知っているが、50歳代以上の人達は、「蛸」のような火星人の絵を懐かしく思い出すであろう。

彼の旅行記は「NOTO」と題してアメリカで刊行された。能登へ旅した行程は、東京 新潟 富山 氷見 荒山峠 羽咋 七尾 穴水 津幡 倶利伽羅峠 富山 長野 浜松 東海道經由東京であった。穴水では「鱈待ちヤグラ」の記述があるし、津幡の三叉路(現在の四つ角)や倶利伽羅峠の記述がある。

この他にも、「加賀の千代女」は富山の井波へ向かう往復に津幡を通っているし、「柴田勝家」は金沢市木越にあった一向一揆の寺内町を滅ぼし、一揆勢のたて籠もる津幡城を落城させた。「前田利家」も末森城を囲む佐々成政を攻める軍議を津幡城で行っている。

幕末、「伊能忠敬」も全国測量のため、内灘砂丘を通っている。昭和天皇も戦後何度か能登訪問、植樹祭などで当地方を訪れた。調べれば意外な人が浮かび上がるかも知れない。

7回にわたって連載した「河北潟沿岸をって行った人々」はこれにて終了します。ご愛読有難う御座いました。
 (河北潟歴史委員会 宮本 眞晴)

シンポジウム「河北潟の水辺を守るためには」講演の内容

2月5日に行われたシンポジウム「河北潟の水辺を守るためには」での3名による講演の概要は以下の通りです（概要の作成は当日の記録に基づき編集部がおこないました）。

「日本の水辺の現状と河北潟のおかれている状況」 永坂正夫（金沢星稜大学）

河北潟は平野部に位置する海跡湖であるが、こうした海跡湖の特徴として、非常に浅いこと、海水が混ざること、周辺からの栄養分が入りやすいことが挙げられる。また、開発の対象となりやすく、戦後の緊急干拓事業の対象とされた。

干拓後、高度経済成長のなかで水質の悪化が進み、他の海跡湖と同様に水質の改善の必要性が叫ばれ、公共下水処理を中心に対策がとられてきた。その結果、1990年代後半から水質が改善されてきているが、依然CODの環境基準が達成されず、現在の対策ではこれ以上の水質の改善は期待できない。

世界的にも下水整備により処理水を湖に入れない方法が主流で、うまくいっている例もあるが、河北潟のように浅い湖では、周辺からのわずかなリンなどの栄養塩の流入によっても影響を受けやすいため、下水対策が完了しても水質の画期的な改善は望めない。

同じ海跡湖の千葉県手賀沼では、利根川の水を導水することにより、汚れを希釈する方法がとられている。流れも生まれCODが減った。ハンガリーのバラトン湖も浅い湖であるが、ここでは湿地帯に河川水を入れ、その湿地を沈殿池とすることによって浄化を図っている。霞ヶ浦では、湖内湖をつくり、そこで一時的に水を溜めることにより浄化を図っている。このようにある程度以上に水質を良くしようとすると、極めて大規模でコストのかかることが必要となる。

水質が悪くなったことと同時に、河北潟では湖岸帯が大きく変えられていることにも注目する必要がある。本来、湖岸帯には生物が

最も豊富であるが、こうした湖岸を再生することも水質浄化と同様に重要である。河北潟の湖岸の現状に近い状況がかつて諏訪湖にはあったが、その後、大規模な湖岸再生事業がおこなわれた。

河北潟において大がかりな再生・浄化事業だけが有効な手段なのかといったことも考えなければならない。河北潟でどういう自然を残したいのか、再生したいのかを見直す必要がある。

「河北潟の水辺の現状と再生の方向性」 高橋 久（河北潟湖沼研究所）

干拓前の河北潟には、水草が繁茂するなだらかな水辺があり、湖岸には舟小屋があり、潟で遊ぶ子どもたちの姿があった。住民は潟の恵みを食べ暮らしてきた。河北潟干拓により、またさらに最近の変化により、全般的に河北潟の水辺が単調となり、危なくなり、生物が住めなくなった。潟と住民の関係が断絶され、水辺とのふれあいも少なくなった。

現在は、水辺レッドリストをつくることのできるほど昔のおもかげの残る水辺が極めて少なくなった。また、レッドリストに掲載される動植物が河北潟にはみられ、保全対策が求められるが、その一部は、すでに最近では確認されていなかったりとか、極めて少なくなったりするという状況が起こっている。また一方で、新たな外来植物の問題が起きている。

そうした状況の中で、河北潟の水辺を再生する方法として、土木工事を伴う公共事業による方法、土木工事をおこなわないことにより自然の回復力による再生を待つ方法、住民の力による水辺の再生の方法の3つの方法がある。

このうち土木工事を主とする公共事業による水辺再生は、大きく形状を改善したり、大規模な効果を期待できるものの、コストの割に効果が不明である場合が多い、画一的で多

(4頁に続く)

(3頁からの続き)

様性の創出につながらない場合がある、一時的に裸地が生じ外来種が侵入しやすいなどの問題がある。また、自然に任せる方法は、水辺の再生に有効であると思われるが、洪水や浸水などの治水上の問題を常に抱えている。

住民による方法は、創意工夫による多様性の創出、きめの細かい管理、土地柄に合った水辺の再生等がおこなわれる可能性があるとともに、豊かな地域社会を作る上でも重要である。

河北潟地域での住民による水辺再生の取り組みはすでに始まっており、河北潟自然再生協議会による住民主体の活動や、行政との協働によるさまざまな活動、私たちも外来種除去の活動や、河北潟カレンダーを発行するなどの活動をおこなっている。

『『水生植物保全プロジェクト』実践の報告』 川原奈苗（河北潟湖沼研究所）

昨年10月から12月におこなわれた「河北潟水質浄化・水生植物保全プロジェクト」の取り組みの様子の紹介と活動の総括をおこなう。

活動がおこなわれた3箇所の水辺で、あわせて5.7トンの外来植物チクゴスズメノヒエと、75キログラムの枯死したヒシが選択的に取り除かれ、当初に予定された範囲の水草の除去と水辺の保全が完了した。

活動の中でさまざまな作業方法や作業道具が開発され、こうした創意工夫が、作業を円滑におこなう上で重要であった。また、こうした技術を獲得できたことから、市民が創意工夫を重ねることにより、手作業によっても水辺を管理することが可能であることを示したものである。

また活動の中で、多くの市民が関心を持ち作業に参加したこと、さらに参加者が楽しみながら作業をおこなうことができたことは、結果として、人と人、潟と人とのふれあいを生み出した。水辺を市民の手で再生・管理することが、心身共に健全な地域社会をつくる

お知らせ

モンゴル科学アカデミー総裁・チャドラー氏が来日

河北潟湖沼研究所では、一昨年よりモンゴルの市民団体や研究団体等との交流をおこなっていますが、このほど私たちの招待に応じる形で、モンゴル科学アカデミー総裁のチャドラー氏が訪れました。1月16日～19日の4日間の滞在中、河北潟や私たちが取り組んでいる水質浄化施設などのいくつかの施設を視察しました。また、バイオマスエネルギーや風力発電に関する情報の収集もおこないました。またその間2回の交流会をおこない、お互いの情報交換をおこなうとともに、友好を深めました。

第46回河北潟自然観察会の報告

2月5日の午前に行われた第46回河北潟自然観察会は、前日の大雪にもかかわらず、元気に参加した9名で実施しました。ときおり地吹雪が舞う中での観察でしたが、普段はなかなかお目にかかれぬオオワシの成鳥が飛翔するなど、とても良い観察会となりました。

猛禽類が極めて多くみられ、厳しい天候の中でこそその野生との出会いというもがあると実感しました。

<編集後記>

今回のシンポジウム「河北潟の水辺を守るためには」は、動員のない主体的な集会でしたが、たいへん多くの方に参加いただきました。河北潟の水辺への関心が高まっていることを感じるとともに、私たち河北潟湖沼研究所のなんらかの役割を果たさなければならぬと感じます。(T)

「かほくがた」 VOL.11 NO.4
2006年3月15日発行
発行所 河北潟湖沼研究所友の会
〒920-0051 金沢市二口町八58
河北潟湖沼研究所金沢事務局内
TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435